下長小

ともに学び合い、考えを深める子どもの育成

～つなぐ授業を通して～（３年計画の４年次）

校長　　宍戸　義彦

１　研究主題について

今年度、本校では「生き生きと輝く子」～思いやりのある子、すすんで勉強する子、体をきたえる子～を教育目標と努力目標に掲げ、それを具現化するために種々の教育活動を展開している。教育目標具現化のためには、基礎的な学習ルールを徹底させ、授業においてユニバーサルデザインの視点を取り入れ、児童の学習への意欲や主体性を高めることが大切であると考える。

昨年度、本校では、「ともに学び合い、考えを深める子どもの育成」という研究主題のもと、主にしかけやファシリテーション・スキルなどの指導方法の在り方を研究してきた。教科を問わず、児童が問いをもつしかけの工夫、ファシリテーション・スキルを用いて、児童の考えをつなぎながら話し合わせる工夫を授業で実践し、検証してきた。研究の成果として、しかけの工夫により、児童の思考に沿って問いが生まれ、課題解決に向けて意欲的に取り組む姿が見られた。また、互いに認め合う雰囲気の中で、教師の共感的・受容的な態度、つぶやきを拾う、問い返す、適切な復唱などのファシリテーション・スキルを用いることで、児童の考えをつなぎながら話し合わせることができた。書く活動を効果的に取り入れることにより、児童の思考を整理したり、まとめたりすることができることも検証された。さらに、「話す・聞く」表を教室に掲示したことで、児童は共感しながら話を聞いたり、立場をはっきりさせて話したりすることができるようになった。一方、課題としてファシリテーション・スキルの検証がより明確になるように、教師は学習する児童の視点に立ち、児童の姿の変容を見ていく授業研究を行っていく必要があることが挙げられた。また、書く活動を取り入れる際、どこで何を書かせるのか、教師のねらいをはっきりさせる必要があるとの意見も出された。

そこで、今年度は、「子どもが問いをもつしかけの工夫と問いの共有」「子どもが考えをつなぐ対話の仕方の工夫（ファシリテーション・スキルの活用）」について研究していく。教科を問わず、これらの工夫を実践することで、子どもが考えをつなぎ、ともに学び合い、考えを深める子どもを育成することができると考える。

２　研究のねらい

ともに学び合い、考えを深める子どもの育成を目指して、しかけや対話の仕方の工夫などの指導方法の在り方を授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

子どもが問いをもつようにしかけた上で問いを共有し、考えをつないで対話させることで、ともに学び合い、考えを深める子どもを育成することができる。

４　研究内容

(1) 子どもが問いをもつしかけの工夫と問いの共有（授業の導入場面）
(2)子どもが考えをつなぐ対話の仕方の工夫（ファシリテーション・スキルの活用）
留意点・・・上記(１)(２)を進める上で次の点にも留意する。
・実態に応じて「伝え合う姿」「考えをつなぐ姿」の表を活用する。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	授業研究
４	２６	研究仮説・研究内容・研究方法、校内研修年間計画、指導案形式についての共通理解
	２１	第１回授業研究（６学年）授業者　川村祐輝教諭　社会「むらからくにへ」
	２８	第２回授業研究（４学年）授業者　上山泰子教諭 社会「ごみのしょりと利用」
	３	第３回授業研究（要請訪問・２学年）授業者　佐々木温子教諭 国語「ミリーのすてきなぼうし」 （八戸市教育委員会　教育指導課主任指導主事　中村　美穂　様）
	１３	第４回授業研究（３学年）授業者　月舘恵美子教諭　算数「分数」
	２０	第５回授業研究（１学年）授業者　奈良真優子教諭 道徳「ともだちのきもちをおもうこころ」
	２７	第６回授業研究（５学年）授業者　溝江翔教諭 道徳「いじめに負けないために」
１１	２９	アンケート
２	１４	今年度の研究のまとめ・来年度に向けての共通理解
	２１	来年度の研究に向けての共通理解

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
５	３１	・水泳指導（本校　溝江翔教諭） ・学級会をしよう～今さら聞けない特別活動～（本校　宍戸義彦校長）
６	１４	・救命講習（尻内分遺所職員）
８	３０	・青森県学習状況調査採点及び分析
１１	１	・特別支援教育（本校　特別支援学級担任）
１	１２	・特別支援に係る講演 （八戸学院大学短期大学部　幼児保育学科　教授　野口和也　様）

６　研究の成果

(1) しかけの工夫により、子どもは問いをもつことができた。また、立場の表明で、ズレを生じさせたことにより問いが子どもに共有された。問いと子どもがつながり、問題解決的な授業となった。また、全員が参加することができ、子どもの意欲にもつながった。

(2) ファシリテーション・スキルを活用して子どもと子どもの考えをつなぐごとに積極的に取り組んだことにより、話を聞く力が向上したとともに、課題解決に向かうことができた。また、教師の共感的・受容的な態度により子ども同士がつながり、よりよい人間関係づくりにもつながった。

(3) 「伝え合う姿」「考えをつなぐ姿」の表により、子どものつなげて話そうとする姿、注意深く話を聞こうとする姿が見られた。

７　研究の課題

(1) 問題解決的な学習に向かうために、今後も教師のしかけにより、子どもに問いをもたせる。さらに立場の相違を顕在化させ、考えることを焦点化し、問いを共有させる授業を継続して行う必要がある。

(2) 話合いの場面で、子どもと子どもをつなぐことに積極的に取り組むことができた反面、「しゃべり合う」にとどまり、「考えを深める」に至ることが難しかった。今後も、考えを深める対話が成立するための工夫が必要である。

(3) 「伝え合う姿」「考えをつなぐ姿」の表が充分に活用されたとは言えない。内容を見直すか、表を活用するかどうかの検討が必要である。

（記入者　寺澤麻美）